

特別講演

「近代測量 150年について」

■小室 勝也氏 国土交通省国土地理院 九州地方測量部 測量課長

6月12日 午後1時～2時



2019年は、明治政府に近代測量を行う機関として、国土地理院の前身である「民部官庶務司戸籍地図掛」（みんぶかんしょむつかさこせきちずかり）が設置された1869年から数えて満150年に当たります。国土地理院は、本年を「近代測量150年」と位置づけ、国土地理院の最近の活動や将来の測位・地図政策について国民の理解と関心を得るための取り組みを行っています。

明治政府は、国土の姿を正確に捉えるため、西洋測量技術を導入しながら組織を拡大し、各地の地名や地理の情報収集、三角測量や水準測量などの基準点測量、全国を網羅した縮尺5万分の1の地形図整備等を進めました。測量・地図作製は、近代

化への国家プロジェクトの一つであり、戦後復興、高度経済成長、防災対策等のインフラ整備の支えとなり、その基本的な体系は現在に受け継がれています。

近年は、GNSS（全球測位衛星システム）を利用することで、基準点の位置を国際的な位置の基準に基づき短時間で高精度に求められるようになりました。また、国土交通省が進めるi-Constructionでは、建設生産システム全体の生産性向上を図るため、測量へのドローン等の投入や三次元データの活用など、新たな技術や手法を積極的に導入しています。

測量は、すべての生産活動の最上流にあるもので、国土の均衡ある発展や安全な国民生活の向上を図る上で重要な役割を果たしています。このことを多くの人々に伝え理解を得ることで、測量に従事する技術者の確保や情報基盤の整備が持続的に行われる社会が実現するものと考えます。

【略歴】小室勝也（こむろ・かつや）。1964年生まれ。82年4月建設省国土地理院入職。企画部防災推進室室長補佐、九州地方測量部地理空間情報管理官、四国地方測量部測量課長などを歴任し、2019年4月から現職。

「唐津城石垣復旧における地盤工学的考察」

■三浦 哲彦氏 佐賀大学名誉教授

6月13日 午後1時～2時



城郭石垣との関りは佐賀大学の福島康太郎君の卒研（H3年度）に始まる。成果をH4土木学会西部支部で発表したところ新聞記事となり、広く知られるようになった。全国185件の調査で、石垣孕み出しは、排水不良・樹木根の押し出し等に起因すると判明。報告を高瀬哲郎氏の監修で、低平地防災研究センターから冊子を出版した。

唐津城石垣は約400年の歴史を有する。H17.1に名護屋城博物館で全国城跡等石垣整備調査研究会、唐津城石垣の現地視察研修が行われ、天守台石垣や本丸石垣の孕み出しの危険性が指摘された。一方、天守閣はS41にRC構造で新築されたものであり、歴史的価値は低いが唐津市

の観光目玉の一つとなっている。

H18.6～H20.3に5回の石垣修復専門委員会が開かれた。予備的調査で推測された変状原因は、地盤崩落による根石滑動、土砂吸出しによる裏込石の沈下・空洞化、木根押し出し、S40天守基礎杭打設時の攪乱・空洞化、石材破損など。第5回委員会で、天守部石垣積み直し時の安定確保の工法として、仮設トラス工法が決まった。

H21.1に石垣再築推進委員会が組織された。西側1面石垣から調査・解体・再築が始まり、天守台下の6～8面積み直しが終わり、東側13～14面の工事に差し掛かっている。

講演では石垣背面地山の地盤特性、裏込め砂の状況、砂吸い出し防止、地山補強グラウンドアンカー工・石垣基礎の支持力補強などを紹介。

【略歴】九州大学卒。佐賀大学教授・低平地防災研究センター長・理工学部部長。佐賀県都市計画審議会会長・唐津城石垣再築委員会委員長。瑞宝中経章受章・土木学会論文賞。フローティング基礎研究会会長など。著書：PBD工法～理論と実際、軟弱地盤上の道路、など。趣味はTV野球・時代劇、初級古文書。

女性技術者講演

「女性技術者から見た建築の魅力」 満原 早苗氏 （一社）佐賀県建築士会 満原建設㈱

6月13日 午後2時～2時45分



大工の娘として生まれ、小さなころから家づくりに関わる職人に囲まれて育ち、建築の道を選ぶことに一つの抵抗もなく工業高校に進学。そこからもう24年、建築の中に身を置いていることになります。

この間、大学時代のアルバイトでは店舗などのデザインや内装工事の現場、卒業後は母校を含む学校での教職、NPO法人での環境建築や過疎地域まちづくりの活動、そして現在の設計事務所と、ひと口に建築といえどもいろんな分野に関わってきました。建築というのは非常に多くの職種が混じり合って無制限の相手

に対応するものであり、これまでの経験全てが今に結びついています。

女性建築士というとまだまだ珍しいという印象が世間一般には強いようですが、建築業界を広く見渡すと実に多くの女性が活躍しています。それはもちろん、専門技術者に限られたことではありません。性別を語ることがデリケートな問題として扱われる一方で、例えば住宅の設計に関しては、「女性ならではの」感性やきめ細やかさが要求されます。女性としての長所、時には短所をまずは自分で認めることが仕事のやりがい、ひいては業界の発展につながると思っています。

今回、「女性技術者から見た建築の魅力」というテーマでお話をさせていただくことになりました。技術者としての経験はまだまだ浅い中で取り組んでいること、日々感じていること、これからの自分や業界に望むことなどを皆さまと共有できればと思います。

【略歴】2003年九州産業大学工学部卒。工業高校講師、NPO法人循環型たてもの研究塾勤務を経て、2010年に家業である満原建設㈱に入社、一級建築士事務所スムコト設計を設置。木造住宅を中心に設計監理業務を行っている。1980年生まれ。

若手技術者発表

「建設業界の魅力」 （一社）佐賀県建設業協会

【質問】①建設業を志望した動機や、きっかけ／②建設業の魅力を一言で言えば

【1日目】6月12日 午後2時～2時30分



今泉 郁也さん 松尾建設㈱ 25歳、入社4年目

- ①新しい道や建物ができていくのを見て、人々の生活を支える建設業で自分も働きたいと思った。
②自分の仕事が形に残り、人々の生活の支えになるところ。



末次 真備さん 牟田建設㈱ 22歳、入社5年目

- ①地域の風景に残せる仕事をしたいから。
②物を作っていく中で、皆で協力しあって完成に近づけていくとき。

【2日目】6月13日 午前10時～10時30分



市丸 竜之介さん ㈱山崎建設 23歳、入社6年目

- ①高校で土木の勉強をし、建設業の重要性や奥深さに惹かれた。
②多くの人々の暮らしを支えるなど、誇りとやりがいに満ちた仕事。



田代 大樹さん ㈱中野建設 24歳、入社3年目

- ①父親が同じ建設業関係で働いており、その影響で建設業を志望した。
②工事着工前と完成した後を比較したときに達成感を感じる。